

主産地の十勝 台風被災



ジャガイモ不足で販売を休止、終了するカルビーと湖池屋の商品。主産地の十勝の不作が影響した

同社が使用する国産ジャガイモ38.4万トン（2015年）の約7割が道産で、うち半分を十勝産が占めている。昨年台風では、管内のジャガイモ畑が流失したり収穫期が遅れたりして、収量や品質が低下。例年は秋から5月にかけて貯蔵したイモを使うが、今年は量が不足した。当初は米国からジャガイモを輸入して補う方針だったが、品質が製品に見合わずに不足分を補えなかった。

カルビーに供給しているJAめむろによると、16年産の出荷量は前年に比べて16%少なかった。同JAは「量が少なかったとしても悪い品質まで出すわけにはいかない。商品の販売休止は心が痛むが、やむを得ない。今年はいいいもを出荷したい」とする。

湖池屋は3月25日に「Mサイズポテトチップス リッチコンソメ」「55gポテトチップス ガーリック」など計16商品の出荷を休止、または終了。主産地の十勝を含む原料の道産ジャガイモの収量減と歩留まり悪化が原因で、今後は「ポテトチップス のり塩」などの主力商品を中心に製造する。

両社とも休止商品の再開時期のめどは立っていない。カルビーの広報担当は「じくじたる思い。（売れ筋商品を）確実に製造できる袋数を担保するため、大きいサイズの販売は休止した」と説明する。

管内のスーパーなどでは今月いっぱい商品は確保できるが、5月以降は別の商品に切り替える計画。該当商品が10種類ほどあるという地元大手の福原のバイヤーは「スナック菓子の売り上げの半分ほどを占めるので影響はある。代替商品で今までの売り上げを確保できるかは不透明で、一日も早く通常に戻ってほしい」と話している。

永久キャンペーン土づくり 耕土再生（上）

2017年5月9日

台風が奪った表土 畑の「歴史」ゼロから 地力回復には時間

昨年8月の台風は十勝管内西部を中心に記録的な大雨をもたらした。氾濫した河川近くの農地は濁流にのまれ、開拓期から苦勞して耕してきた畑が一晩で流失した。「土が流されたんじゃない。“歴史”が流されたんだ」。JA幹部は唇をかんだ。

国の激甚災害の指定を受け「災害復旧事業」の対象になった農地の面積は、帯広、芽室、清水を中心に6市町で計291.6ヘクタール。東京ドーム62個分になる。これは表土の流失や土砂が堆積した部分のみの広さで、営農できなくなった区画全体の面積はさらに膨らみ、4倍になるとの見方もある。



戸蔭別川の氾濫被害を受けた帯広市清川町の農地。復旧作業と春の整地が同時並行で進んでいる

補充にはめど

昨年末から始まった農地の復旧では、流された表土の代わりに、管内の河川工事で出た掘削土を活用している。搬入する土探しや運搬費の負担がないメリットは大きく、130ヘクタールが今期の作付けに間に合う予定だ。

ただ、関係者は「土づくりの課題はこれから」と口をそろえる。搬入された土は、畑の土と性質が異なり、栽培に適した土になるまでは時間がかかるからだ。表面上は元通りになっても、同じ区画の中で地力に差ができて、生育が均一にはならない。中には4カ所の土が運び込まれた畑もある。生育管理には苦勞が予想され、収量も作ってみたいと分からない。

芽室町では、美生川や芽室川周辺の沖積土の畑が被害に遭ったが、運び込まれたのは粘土質の土が目立った。所有する畑の7分の1に当たる5ヘクタールが流された同町美生の浅田文浩さん（55）は「元のように作れるようになるには10年はかかるのでは」と肩を落とす。

支えるJA

JAめむろでは4月中旬、被災農家を対象に土づくりについて説明会を開催。土壌分析の結果を示して注意点を伝えた。企画した農業振興センターの長濱修センター